播磨灘広域共同調査（抄録）

(平成18年度川上から川下に至る豊かで多様性のある海づくり委託事業)

加藤慎治・酒井基介・平野　匠

本調査は養殖魚類及び貝類の大量へい死を引き起こす*Chattonella antiqua*や*Heterocapsa circularisquama*等に代表される有害赤潮種の増殖と環境要因との関係を調査・検討し，効果的な赤潮モニタリング及び予察技術の確立に資するため，赤潮頻発期である7，8月に兵庫県，岡山県，香川県と共同でプランクトン出現調査，海洋環境調査等を実施したものである。

平成18年度における徳島県担当水域（播磨灘南東部）での有害プランクトンの出現状況について取りまとめたので，その概要を報告する。なお，詳細については「平成18年度川上から川下に至る豊かで多様性のある海づくり事業赤潮等被害防止対策事業報告書」を参照されたい。

○有害赤潮プランクトンの出現状況

*Chattonella*は調査開始の7月当初から確認されたが，例年に比べ出現細胞数は少なく8月中旬にはみられなくなった。また漁業被害も発生しなかった。最高細胞数は0.25cells/ml（7月20日）

*Karenia mikimotoi*は7月初旬から出現し，8月上旬には最高細胞数が140cells/mlに達するなど比較的高密度で推移したが赤潮形成には至らなかった。

*Cochlodinium polykrikoides*は7月中旬以降発生がみられたが，最高細胞数は8cells/mlと期間をつうじて低密度であった。

*Heterocapsa circularisquama*は播磨灘では期間を通じて出現がみられなかった。

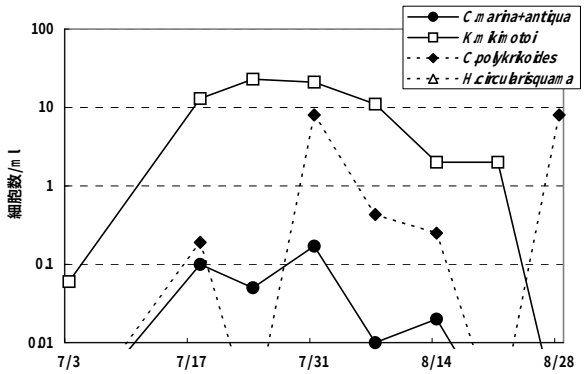

図1　播磨灘における有害プランクトン細胞数の推移